Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2016, Vol.25, 435-442

報 告

身近な英語を主体的に身に付けて思いや考えを豊かに表現する外国語科授業の創造

阿久根　　崇［鹿児島大学教育学部附属小学校］

The creation of foreign language classes that develop rich expression of thought

AKUNE Takashi

キーワード：主体的、身に付ける、考えを高める、達成感を味わう、豊かに表現する

１　研究の背景

現在のグローバル社会でよりよく生きていくためには，異なる言語や文化的背景をもつ人々と互いに理解し合い，積極的に情報や考えを発信し合いながら，共存していく資質や能力が求められる。そして，そのためのツールとして国際共通語である英語力はますます重要となる。

このような社会的な背景を踏まえ，文部科学省は平成 25 年に「英語教育改革実施計画」を公表し，平成 26 年 9 月の英語教育の在り方に関する有識者会議による「今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」では，小・中・高を通じてアジアトップクラスの英語力を目指すとした。

文部科学省の方針を踏まえると，今後の小学校外国語教育においては，これまでに加え，子どもたちに以下を育むことが求められると考えられる。

積極的な態度
・「読む」「書く」態度の育成を含む。

知識・技能
・「文字の認識」や「文構造への気付き」を含む。
・「読む」「書く」を含めた４技能を養う。

思考・判断・表現力
・英語４技能を活用する力を養う。

そして，このような資質・能力を養うために，小学校中学年から外国語活動を実施することや高学年において教科として行い，「聞く」「話す」に加え，積極的に「読む」「書く」の態度を含めたコミュニケーション能力の基礎を養うとした。

本校では，平成５年に研究開発学校の指定を受けてから，小学校１年生から６年生の全学年において週１時間の外国語活動の授業を行ってきた。子どもたちにとって身近な場面で用いられる表現や親しみのある物の名前等を素材として，担任または英語専科と，常駐する ALT とでティームティーチングの指導形態で学習を展開してきた。そして，教育課程特例校の指定を受けた今年度からは，「コミュニケーション能力の基礎」を養うことを目標として，全学年において教科としての授業を展開してきている。

これまでの研究の成果として，近年の本校の高学年に見られる実態は以下のとおりである。

○　外国の文化や英語への興味関心が高い。
○　英語を学ぶ意義を理解している。
○　外国の人にも物怖じをせず，積極的に関わろうとすることができる。
○　非言語的手段の有効性について理解している。
○　聞くことの能力が優れている。
○　日本語と英語の発音の違いに気付き，英語の発音が優れている。

このような子どもの姿は，一朝一夕に見られるものではなく，長年の教育実践の積み重ねによるものであり，これからの小学校外国語教育の指標ともなるべきものである。特に，コミュニケーションの積極的な態度については，子どもたちが将来的に英語を学ぶ上での基盤となる最も重要な要素であるので，今後も継続して育むことができるようにしていく。

一方で，コミュニケーション能力の基礎を養うという目標に照らしてみると，以下のような課題とその要因が見られる。

●　発話への積極的な態度に課題

間違えてもよいことは理解しているものの，高学年では友達の目を気にして，間違えることに恥ずかしさを感じる傾向がある。頼りになるものが音声のみのため，自分の知っている英語に自信がもてず，英語での発話に躊躇する。

● 身近な英語を身に付けることに課題

聞き違えて身に付いている語がある。例えば，“Here you are.”を「ヒーユーワイ」のように発話する姿等が見られる。

● 考えて，会話を展開することに課題

知っている英語であっても，会話を展開するために考えて活用することができない。例えば，“I like ～ .”“Do you like ～ ?”に慣れ親しんではいるが，外国の人との実際の交流場面では，「会話はしたいけれど，何を話せばよいか分からない。」というように，身に付けた身近な英語を活用して会話を展開することができない。

以上のような，本校の外国語教育の成果を生かしながら，課題となる「発話への積極性」「身近な英語の定着」「コミュニケーションに向けた思考」等の子どもの姿を解決することは，中学校での外国語学習への円滑な接続を図るものであり，また，生涯にわたって英語を学習する際の基盤となる資質・能力を子どもに養うものである。これは，先に述べた今後の英語教育の方向性を具現化することにつながるものでもあるため，今後の英語教育の在り方を探る際の有力な情報となるものであると考える。また，現在，全国で実施されている外国語活動にも当然ながら内容・方法でつながるところが多く，県下の学校に広く寄与するものである。

２　研究の方向

先に述べた本校の子どもたちに見られる課題の要因として，次のような学習指導の課題が見えてきた。

子どもが興味・関心や知的好奇心を喚起する体系的な学習内容を設定し，目的の達成に向けて必要なことを子どもが主体的に見出して身に付けたり，自分なりの方法で工夫しながら表現したりするための働きかけが不十分である。

これまで，ゲーム活動やスキット作り等の英語を使った楽しい活動を行う学習指導を通して，本校の子どもたちには前述したような多くの成果が見られている。

しかし，いわゆる「活動の楽しさ」は味わっているものの，特に高学年において，知的好奇心を喚起させたり，必要感を感じさせたりする学習内容の設定の工夫が十分にできていない面があると考えた。それは，外国語活動の性質上，体系的な学習を行っていなかったため，子どもが学びを積み上げながら，学んだことを活用して達成感を味わうことが十分にできていなかったことに要因があると考えられる。

また，音声による体験的な活動を通して身近な英語に慣れ親しんではいるものの，記憶が十分でなく，身に付けて活用できるまでには至っていなかったのではないかと考えた。

さらに，ALT や友達とコミュニケーションを図る場面においては，本時の学習で扱った表現をそのまま活用するコミュニケーションに留まってしまい，相手意識をもとにして，「どんな英語を用いれば伝わるか」「よりよく伝えるためにはどんな工夫が必要か」と，子どもが主体的に考えて，自分なりの方法で工夫しながら表現するための働きかけが十分にできていなかったのではないかと考えた。

そこで，子どもが主体的に必要な英語を身に付けたり，相手に伝えるために考えたりしながらコミュニケーションを図り，学びの達成感を味わうことで，次へのコミュニケーションへの意欲を高めていくような学習内容を設定し，学習指導を展開することが必要であると考えた。

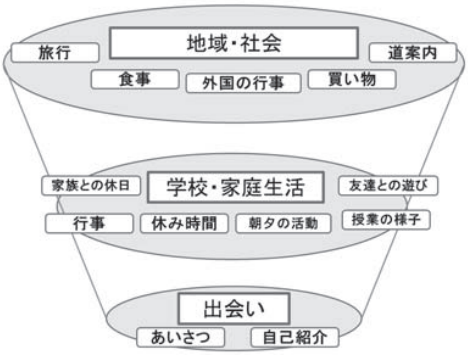
よって，本研究では，次のようなテーマを設定し研究を進めることにした。

身近な英語を主体的に身に付け，思いや考えを豊かに表現する外国語科授業の創造

３　身近な英語を主体的に身に付け，思いや考えを豊かに表現する外国語科授業とは

子どもが学習への興味・関心や知的好奇心を高め，目的をもって学習に取り組むことができるよ

うにするためには，子どもの生活経験や学習経験，発達特性を踏まえたコミュニケーションの場面設定を行うことが必要である。そこで，図１のようにコミュニケーションの場面を捉え，設定していく。



【図１　コミュニケーションの場面の捉え】

このことから，身近な英語とは，小学校段階の子どもたちにとって，上のような身近な場面で使われる基本的な英語の語彙や表現である。それぞれの場面で扱われる語彙や基本的な表現が，体系的に設定されていることが，子どもの学びを深めたり達成感を味わわせたりするために必要である。そのため，身近な英語とは，これらの場面で使われ，中学校との系統を踏まえているものである。

主体的に身に付けるとは，目的の達成に向けて必要な英語を自ら見出して獲得し，活用できるように記憶に残すことである。そのために，学習指導の工夫として，次項図２のように**「身に付ける場」**を設定し，必要な英語がどの程度身に付いているのかを把握させたり，解決の方法を見通させていく。例えば，これまでのＡＬＴやＪＴＥとの口頭練習やリズムチャンツ・ゲーム活動に加え，相互評価等を取り入れることで，友達と学び合いながら，より主体的に必要な英語を身に付けられるようにする。また，音声や絵の情報に加え，英語の文字による情報を扱うことで，記憶を強固・付加・修正できるようにしていく。

また，豊かに表現するとは，自分の思いや考えを相手に伝えるために，身に付けた英語を使ったり，非言語的な手段を用いたりして主体的に考えながら自分なりに工夫して表現することである。そのために，学習指導において，**「考えを高める場」**を設定し，相手意識をもったよりよいコミュニケーションに向けて,「どんな英語を使って」「どんな工夫をして」表現するのか考えを高める活動を設定する。具体的には，使った英語やジェスチャー等を観点として，互いの表現について助言し合ったり一緒に工夫したりする等の学び合いの活動を設定する。その際，子どもの思考を可視化できるようなワークシートを用いたり，考えの構築や深まりが見られるような板書の構成を工夫したりする手立てをとる。

さらに，考えて表現したことへの達成感を味わわせ，今後のコミュニケーション活動への意欲をより高めるために,「達成感を味わう場」を設定する。ここで，考えて豊かに表現することができたことを振り返る場を設定し，その要因を考えたことに見出させたり考えるよさを実感させたりしていく。例えば，相手と協働しながら会話の内容を広げたり，学習成果の発表を通して互いの表現のよさを認め合ったりする学び合いの活動を導入する。また，教師による価値付けを通して，達成感や考えるよさをより一層実感させたり，次へのコミュニケーションへの意欲を高めたりしていくようにする。

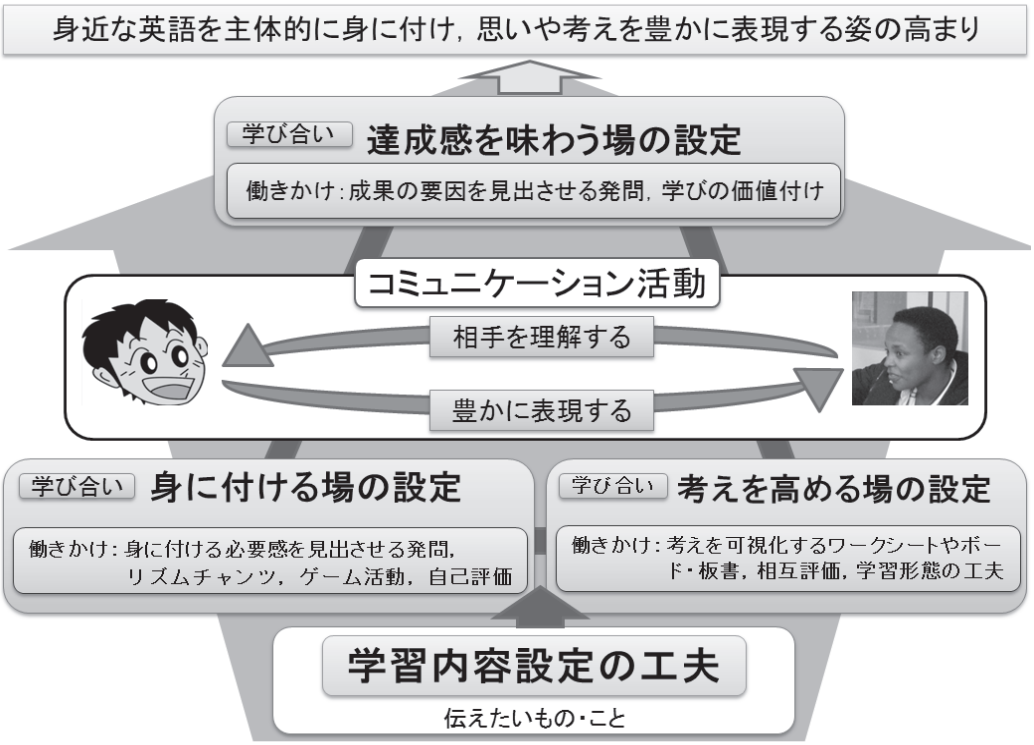
以上が一単位時間の学習において具現化することができるように６年間を見通した体系的な学習内容を設定するとともに，学習指導として「身に付ける場」「考えを高める場」「達成感を味わう場」の３つの場を設定し，友達と学び合いながら学習を深めていくことができるよう指導法を工夫していく。

４　身近な英語を主体的に身に付け，思いや考えを豊かに表現する外国語科授業の創造にあたって

⑴　学習内容設定にあたって

子どもが学習内容に興味・関心をもち，目的達成に向けて主体的に取り組むことができるよう，以下の視点でこれまで実施してきた年間計画を見直し，必要に応じて工夫・改善することとした。

①　中学校との接続を図るとともに，体系的な



【図２　身近な英語を主体的に身に付け，思いや考えを豊かに表現する姿の高まり】

学習を実現する観点から，言語活動（話すこと，聞くこと，読むこと，書くこと），言語活動の扱い方（言語の使用場面，言語の働き），言語材料（身近な語彙・表現）を内容設定の柱とする。

② 扱う語彙・表現は，場面の系統や中学校との系統を踏まえており，子どもに身近なものとする。表現については，学習経験や発達特性を踏まえ一人称・二人称を中心とし，現在形の平易なものとする。

③ コミュニケーションに向けて考える必要感をもつことができるように，コミュニケーションの相手や目的を明確に設定する。

④ 子どもの発達段階や生活経験及び学習経験，他教科との関連，中学校との接続等を考慮しながら，子どもの興味・関心を喚起し，主体的に取り組むことができる話題やタスクを設定する。

⑤ 英語を学ぶ意義や達成感を味わうことができるよう，身に付けたものを活用することができたり，協働したりできるような内容を設定する。

このような視点を踏まえた学習内容を基に，単元を構成したり，一単位時間における学習活動を設定したりしていく。

⑵ 指導方法について

本校では，単元の学習過程として「意欲をもつ」「つかむ」「挑戦する・広げる」「振り返る」過程を設定している。単元を構成する際には，子どもが学習への関心・意欲を高め，必要な英語を身に付け，考えて工夫しながらコミュニケーションを図り，達成感を味わうという一連の過程を単元に具現化していくことが必要である。そこで，前述の「身に付ける場」「考えを高める場」「達成感を味わう場」の３つの場を，それぞれの過程にいずれも位置付けていくが，学習過程や子どもの思考に応じて，３つの場を重点的に位置付けていくこととした。

下の表１は，単元の学習過程における３つの場の重点等を示したものである。

また，一単位時間の学習指導を展開するにあたっても，「身に付ける場」「考えを高める場」

「達成感を味わう場」の３つの場を踏まえて，学習の過程を構成した。３つの場で設定する具体的な活動は表２のとおりである。

また，一単位時間の学習指導を展開するにあたっても，「身に付ける場」「考えを高める場」「達成感を味わう場」の３つの場を踏まえて，学習の過程を構成した。３つの場で設定する具体的な活動は表２のとおりである。

【表１　単元における学習過程】

	３つの場の重点	子どもの主な活動	教師の働きかけと子どもの思考の様相
意欲をもつ	身に付ける 考えを高める 達成感を味わう	学習内容と出合う。 本単元の目的を見出し，目標を設定する。 単元でのコミュニケーション活動をするために必要な英語について話し合う。	ＡＬＴとのスキットやＩＣＴ活用を通して，相手や目的，場面が明確で，意欲を喚起する学習内容を提示します。 「単元の目的を達成させるために，どんな英語が必要か」と発問したり，学び合いを導入して，活動の計画を見通させたりします。 楽しそう。留学生に鹿児島の特産品を紹介するために，色や形，紹介の仕方を英語で言えるようになりたいな。
つかむ	身に付ける 考えを高める 達成感を味わう	単元でのコミュニケーション活動に必要な英語を主体的に身に付ける。	口頭練習やリズムチャンツ，ゲーム活動の後に相互評価を取り入れるなどして身に付いている状況を捉えさせます。 色や形，紹介の仕方は全部分かった。でも，かるかんが甘いことを伝えるには，どうすればいいのかな。
挑戦する・広げる	身に付ける 考えを高める 達成感を味わう	よりよい伝え方の工夫や会話の内容の広げ方を考える。 学びを生かして，コミュニケーションを図る。	コミュニケーションの内容や方法，子どもの考えが可視化できるようなワークシートや板書の工夫をし，学び合いの促進を図ります。 「甘い」は“sweet”だよ。でも，これだけじゃ，まだ，伝わらないかも。□□さんみたいに，材料も伝えようよ。
振り返る	身に付ける 考えを高める 達成感を味わう	学びを生かして，よりよく相手に伝えたり会話の内容を広げたりする。 単元の成果とその要因を見出す。	子どもの学びを積極的に価値付けします。そのために，子どもの学びの過程を可視化し把握しておくようにします。 鹿児島の特産品を英語で伝えるのは難しかったけど，考えたり工夫したりしてできたからうれしいな。今度は，違うものを英語で話したいな。

【表２　一単位時間における３つの場で設定する学習活動】

身に付ける場
【活動例】 スキット視聴，口頭練習（発音の確認），リズムチャンツ，ゲーム活動，文字を読んだり書いたりする活動
考えを高める場
【活動例】 ゲーム活動，スキット，コミュニケーション活動，コミュニケーションの内容や方法を話し合う活動，文字を読んだり書いたりする活動
達成感を味わう活動
【活動例】 コミュニケーション活動，スキット等発表，自己評価，相互評価，学びの過程を振り返る活動，文字を読んだり書いたりする活動

５　身近な英語を主体的に身に付け，思いや考えを豊かに表現する外国語科授業の実際

これまでの研究内容を反映し，第６学年“What Can You Do? ～何ができる？世紀の発明品”の実践を行った。

⑴　単元について

子どもにとって，自分が考えたものやことを他者に伝えたり，友達の考えたものやことについて聞いたりする意欲を喚起するものである。また，空想のものやことを話題にするため，相手との情報のギャップが生まれ，相手によりよく伝わるように工夫したり，相手の伝えようとすることを察しながら聞いたりする必要性に気付かせることができるものでもある。

そこで，自分が考えた発明品やその発明品を使ってできることを話題にしてコミュニケーションを図る活動を設定するならば，子どもたちのコミュニケーションへの意欲をより高めることができると考えた。また，伝え合う際に使用する英語を身に付けたり，相手とより確かに伝え合うために工夫をしたりする必要感を高めることができるとも考えた。さらに，動作を表す英語や“can”を用いてできることを紹介する英語を身に付けさせることもできると考え，本単元を設定した。

⑵　単元の指導計画

本単元は全４時間で構成した。

まず，第１時では，クイズ形式での世界の発明品紹介を視聴させることを通して，単元の学習への見通しをもたせるようにした。また，事前に調べていた「できるようになりたいことランキング」を発表し，「どんな空想の道具があれば，できるようになりたいことを実現できるか」と問うことで，興味・関心を喚起するようにした。

第２時では，スキット提示を通してオリジナルの発明品をテレビショッピング形式で紹介することをつかませ，必要な英語を見い出させる話合い活動を行った。また，一人あたりの発話量が多くなるゲーム活動や文字を扱った活動を設定し，必要な英語を身に付けさせた。

第３時では，オリジナルの発明品をテレビショッピングで紹介するための学び合いを設定した。紹介を見る友達を「買い手」と見立て，「伝え方の工夫」「使った英語」の観点で互いのよさを認め合いながら，相手に伝わる（買いたくなる）ように表現を高め合う活動を行った。

第４時では，オリジナルの発明品を紹介し合う活動を行い，学びの達成感を味わうことができるよう，互いの取り組みを認め合う相互評価を行った。タブレット端末を活用し，自分の表現が自分で見られるよう工夫した。

⑶　本時の目標

オリジナルの発明品を使ってできることについて，JTE や ALT，友達とよりよく紹介し合うために，必要な英語を使って，相手に応じて工夫しながらコミュニケーションを図ることができる。

⑷　本時の展開に当たって

本時では，思考の高まりを目的にした学び合いが重要だと考える。そこで，JTE と ALT による２種類のテレビショッピングを示し，「相手に伝わりやすくするために，どんな工

夫ができるか」と問うことで観点を子どもから引き出すようにする。また，子どもの思考に沿ってペア・グループと学習形態を変化させるとともに，ワークシートを活用して会話の流れを可視化させる。

⑸　結果と考察

○　世界の発明品をクイズ形式で導入する活動では，国語科で学習した点字を発明したルイ・ブライユを扱うなど，生活経験や他教科との関連を踏まえることで，知的好奇心を喚起し，単元の学習への興味・関心を喚起することができた。

過程	主な学習活動	使用英語・ルール	時間	教師の具体的な働きかけ
意欲をもつ	1　Watching Network Shopping 2　Meeting Today's Target Let's　introduce each other. ・できることを紹介するには，どんな工夫をすればよいのだろうか。	A:Hello. I'm Christopher Sneller. J :I'm Takashi Akune. A:Hi,Mr.Akune. This is a special bat. J :Special bat? With it, What can you do? A:I can hit homerun. J :Oh. It's very nice.	10	○　紹介の際に必要な英語や伝え方の工夫を捉えさせ，活動への意欲を高めるために，JTE と ALT による２種類のテレビショッピングを視聴させ，比較させる。その際，**「相手に伝わりやすくするために，どんな工夫ができるか。」と問い，子どもから引き出した観点を「必要な英語」「伝え方の工夫」に分類して板書する。**
つかむ	3　Practice 4　Rhythm Chants だんだん英語が分かってきたよ。僕にもできそうだな。	**【チャンツで扱う英語】** With it,What can you do?/ I can play soccer well./ I can　speak English well/ I can swim fast./ I can run fast.	10	○　紹介する際の会話の内容を捉えさせるために，会話の流れに沿った口頭練習を行う。“What can you do?”については本単元が新出のため，子どもの実態を捉えて，**「発話する速度」「発話する回数」に特に留意する。**
挑戦する・広げる	5　Making Network Shopping 【ペアでの学び合いで，英語を身に付ける】 英語には慣れてきたけど，会話になるとまだできないな。友達ともっと練習しよう。 【よりよい伝え方について考える】 友達と一緒に活動したから，会話をできるようになったよ。もっとよく伝えるためには，どんな工夫ができるかな。 **学び合いの観点** 〈言語的手段の観点〉 ・英語の伝わりやすさ ・発音 ・既習英語の活用 ・相手への応答 〈非言語的手段の観点〉 ・表情 ・声量 ・あいづち 6　Presentation 工夫して紹介ができているよ。特に，相手が言ったことに返しているのがいいね。		20	○　**会話の流れを可視化することで，音声を補完させる**ために，基本的な表現である“I can ～.”“What can you do?”については，ワークシートに視写させる。 ○　テレビショッピングを作る活動にあたっては，子どもの思考を踏まえて段階的に学びを深めるために，まず，**扱う英語を観点としたペアでの学び合いを導入**する。その後，非言語的手段を含めた伝え方の観点で，**グループでの学び合い**を導入する。
振り返る	7　Reflection 使う英語や伝え方を工夫することができたよ。特に，ペアの友達と協力できたのがよかった。 8　Premonition		5	○　学びの達成感を味わわせるために，**ワークシートに自己評価**をさせるとともに，「扱う英語」「伝え方」の観点で，**一緒に活動をしたペアで振り返り**をさせる。**振り返りの内容を全体に広げ，本時の学習に対する価値付け**をする。

○ 「できるようになりたいことランキング」を基にし，「発明品を紹介する」という単元を貫く目的意識をもたせることで“play baseball well.”“run fast”のような動作を表す英語や“I can ～”のようなできることを紹介する英語を子どもが必要感をもって身に付けることができた。

○ 発話量の多いゲーム活動や学び合いの要素を取り入れたリズムチャンツ，文字を扱った活動を通して，必要な英語を身に付けることができた。

○ テレビショッピングの場面設定を行うことで，売り手と買い手の立場が明確になり，相手意識をもってコミュニケーションの在り方を考えながら工夫して表現しようとすることができた。

６　研究の成果と課題

⑴　成果

○ 視点を基にした高学年の学習内容の設定により，子どもたちが学習活動に意欲的に取り組むことができた。

○ 単元の過程や一単位時間において，ねらいを明確にして「身に付ける場」「考えを高める場」「達成感を味わう場」を重点的に位置付けることによって，子どもが必要な英語を主体的に身に付けたり，工夫しながら自分の思いや考えを表現したりしようとする姿が見られた。

⑵　課題

○ 視点を基にした学習内容の工夫・改善を，中学年及び低学年でも行っていくとともに，必要に応じて単元開発を行う。

○ 文字の系統的な扱い方や必要な英語を身に付けるための効果的な指導方法を追求していく。

付記

本報告は，鹿児島大学教育学部附属小学校平成25～27年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき，外国語教育において研究をさらに発展させ，その研究成果をまとめたものである。

【主な参考文献】

○文部科学省「小学校学習指導要領解説」（東洋館出版社　平成２０年度）

○文部科学省（2013）英語教育改革実施計画 mext.go.jp（参照日 2015.9.8）

○文部科学省（2014）「今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」 mext.go.jp（参照日 2015.9.8）

○文部科学省（2015）生徒の英語力向上プラン mext.go.jp（参照日 2015.9.8）

○文部科学省（2015）教育課程企画特別部会における論点整理について（報告） mext.go.jp（参照日 2015.9.8）